

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

「音楽・舞踊研究 — トルコを事例として」

松本 奈穂子(東海大学)

音楽・舞踊学は基本的に「音」と「身体動作」およびこれらを組織づける人間の様々な営みを主な研究対象とする。後発の研究分野であるため、美学、歴史学、社会学、政治学、文学、記号学、言語学、物理学他様々な学問分野の研究手法を目的に応じて参照する。本セミナーでは当該研究の着眼点について、トルコを事例にいくつか紹介した。貴重な場を与えてくださったアジア・アフリカ言語文化研究所の皆様に感謝するとともに、これからの研究を担う若い皆さんに当日はお話したい内容を十分に伝えきれなかったので、本報告にて補足したい。まず、音楽・舞踊に少しでも関心を持つ方には音楽学者徳丸吉彦(報告者の音楽学上の恩師)の諸文献とりわけ入門用に、研究上のいくつかの着眼点をわかりやすく示唆する『民族音楽学』、『民族音楽学理論』を挙げる。基本的な欧米文献が網羅され、報告者が音や動作分析に用いることの多い間テキスト性、分節および単位、範列、研究対象に関する視点の多様性(調査結果は対象が持つであろう性質の一部)といった諸概念の一部も含まれている。

どの事象も単独では成立し得ず、多様な脈絡から切り離して考えるべきではないように、音楽・舞踊研究においても常に様々な相関への目配りが必要である。音楽と舞踊の相関、動作・図像・リズム・音列研究、音楽・舞踊の歴史的/社会的背景といった多角的な研究は、多様な相関を様々な角度から考察する上で相乗効果が多々ある。音楽と舞踊の相関を見る上で、報告者は両者の接点の 1 つであるリズムに焦点をあてている。これはトルコおよび周辺地域が混合拍子とそれにあわせて踊られる舞踊の宝庫であり、後述の研究項目とともに国境で区切ることのできない文化の連続性が把握できる一方で、各国の文化政策により異なる変容プロセスを辿る音楽・舞踊の変遷とその結果といった特性の一部を明らかにしやすいからでもある。リズムは人々の生活と共にある為様々な変化に応じて伸縮するが、研究上数値に置き換えられると「規範譜」にありがちなようにその数値が固定・概念化されてしまいやすい。その結果、同種のリズムが異なるシステムの中で別個の拍子として認識されていくという現象が生じる。これを理解する為には関連諸国の「公定」音楽理論と、それを知る/知らない演奏者たちによる実演および音楽認識の多様なヴァリエーションに触れることが必要である。

音高組織に関しては素材としての音列の応用や、実演と理論との相違に現時点では関心がある。前者は当事者・他者による表象の創出と受容およびそれらにまつわる多様な解釈の問題も含む(例えばビジャーズ音列とそれに近似した短 2・増 2・短 2 度音列による西アジア/イスラームの表象やロマ音階との関連性、キュルディー音列とそれに近似した短 2・長 2・長 2 度音列を含む地中海全域の音楽など。音による文化表象は音長組織にも見られ、コーカサスの代表的な舞踊レズギンカのリズムや南コーカサスのウチュ・バダム・ビル・ゴスーアゼルバイジャンでの通称一などはその顕著な例である)。後者は理論形成や楽器製作と需要の問題から、最終的に前者の問題に通じる(例えばトルコでは全音を理論上 9 分

割するが、トルコのカーヌーンでは音程調性ツマミにより全音が 12 分割される。これは同じ名称の音程に対して旋律上の出現箇所により選択される実音が複数対応するため)。さらに、トルコと周辺諸国に共通する伝統音楽・舞踊モチーフのオーケストレーションや舞台化舞踊技術を国ごとに比較すると、文化政策や社会システムの相違による変容の違いが明確で興味深い。

上記物理的構造寄りの諸研究と連動させて、音楽・舞踊の社会・歴史・政治的機能を見ることも、両者はこれらを映す鏡ともなるので重要である。トルコでは建国以後国家が推進する音楽ジャンルとして西洋音楽と「トルコ」民俗音楽の統合が目指されたため、トルコ主義路線と連動しつつ「人民の家」を中心として行政区分ごとに民俗音楽・舞踊の収集・整理とその産物の教育・普及が促進された。トルコ性を付与された公定民俗舞踊(国民舞踊)は団結感を強めナショナル・アイデンティティを醸成する装置の一つとして機能し続けた。一方トルコ国内の音楽・舞踊の多様性への理解には、公定カテゴリーに含まれない様々な民俗音楽・舞踊活動にも留意する必要がある。出自に基づく各種文化協会や、村などの共同体における伝統音楽・舞踊活動はその例であり、報告者はこれまでにアゼリー系、グルジア系、チェルケス系などコーカサス系トルコ国民の音楽・舞踊活動の諸相と公定音楽・舞踊との関連性、アイデンティティの多面性について考察を試みている。ユダヤ、ギリシャ、アルメニア、クルド、アラブ、バルカン系トルコ国民等様々な出自集団の音楽・舞踊活動にもこうした様々な諸相が認められる。

オスマン朝末期の音楽・舞踊については知識人らによる音楽関連言説・思想の変遷と、実際に演じられていた多種多様な音楽・舞踊活動記録調査の双方に現時点では焦点をあてている。共和国建国後民俗音楽がトルコの代表的な音楽として重視された一方で、オスマン朝の音楽は忌避すべき対象として教育のなされない時期もあり、その影響は今も尾をひいている。イスラーム寄りの現政権以降オスマン朝の音楽は再評価の方向にあり、研究が進み始めているが、王道のトルコ古典音楽理論および著名作曲家作品中心の傾向が強い。他国同様トルコでも 19 世紀から始まる西洋音楽の本格的受容により伝統音楽との多様な文化触変が見られ、演奏の場・演奏様式等多様なファクターにおいて様々な折衷様式が認められる。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所蔵のオスマン朝末期演劇資料は従来のトルコ音楽研究対象になりにくかったこれら諸相の一端を如実に物語り、今後のトルコ音楽研究の発展上も貴重な資料である。